

ありのままの日本とは

aquilex

地方にも近代化の波は押し寄せ、町の景色がかわりつつある。個人商店は錆び付いて崩れ消えていき、どこにでもあるような見覚えのある看板の店舗がぼつぼつ点在していくのである。あらゆる業種のそれらは見事に軌道に乗り定着してしていく。地方では公共の交通手段が発達していないので自家用自動車での移動が常識化されていて、それこそ生活の必須アイテムなのである。これまでの日本の主要産業である自動車製造は、遠い昔の庶民の夢を実現させていた。現在我々庶民は様々なものを手に入れることができるようになった。高度成長期という時代を経過し、労働者層も裕福になり汗を流すことを敬遠するようになった。技術も高度に成長して人間の労力を軽減する機械装置が考案されるようにといった具合に、まるで映画「ターミネーター」のようにロボット化は進む。この最先端の日本の技術や知識に日本の大衆は追随することができるのかは疑問で、反ってロボットに仕事を奪われ職を失いつつある。このごく一部に掌握された部分はもはや国家という枠組からは乖離してしまっていてノアの箱舟にのって行ってしまったとしてもなんら不思議なことではない。のこされた我々としては、単にいきていくための原始的な生活に立ち返らねばならないことを、社会放棄してしまってアルミ材を收拾する集団から学ばねばならない。こうした経験からによる道理のようなものを儒学は伝えている。儒学は江戸時代に盛んに武士に取り入れられていたようであるが、発祥である地では、どうやらそれほど熱心ではなかったらしい。陳舜臣の「中国五千年」「ものがたり史記」「儒教三千年」には、なにかしら日本の土台のようなものがみえるようなのだ。そんな折に恥ずかしながらはじめて司馬遼太郎の本をてにとってみたのである。「歴史の中の日本」というタイトルであった。読書とは縁のなかった私にとってセンセーショナルな一冊であった。すごい知識量であるということ。表現がスマートであること。そしてなによりも本自体が語りかけてくること。この本は、知識をえることに対して自然体になることを教えてくれた貴重な一品である。そして、この情報源は偶然にして地方の古本マーケットで百円で発掘された。ところが、面白くなって未入手の下巻を探すと、巻末に案内されている関連本を探すと、もはやそう易々とは遭遇できない。そうして周辺の中古ブックストアを駆け巡るも、ある程度は入手できるがすぐに行き詰まることになる。そこでやっと気付くことになったのが彼の有名サイトの「物凄さ」なのだ。全国の加盟店の収蔵から一気に検索がかけることができ、おまけに既読者のコメントにまで与れたりする。そこにまた関連図書などが表示されたりされるから、かなりロングなサーフィンが楽しめる。なにが素であったかわからなくなる。「ぶつとぶ」。国際社会の檣舞台に晒され、日本企業の技術でどうにか持ちこたえてきた日本経済も、米経済の不調と中国経済の高度化に右往左往している。中国が世界の生産工場となりまたその技術や品質も向上して今や世界から必要とされるまでになっている。安かろう良かろうなのだ。ただ、貧富の差が極端に激しく、富めるところから富む開放政策はおわりをみないのだが、巨大国家ゆえに制御不能に陥っているようにみえる。既得権者にしてみれば、このままでよいのであって、開放政策の目的が完遂してしまっただけでは困るというのが本音ではなかろうか。また、単純に考えても、生産工場で大量に生産した製品が売れなければならないわけで、他国に売るときは自国通貨が安くなければ分が悪い。労働者は技術向上などを理由に賃金アップを要求するだろう。裕福になるにしたいが労働意欲は失せ労働の質は低下する（日本の話か？）。知的階級、資産家は金融という利益獲得手段も用いる。知識のない貧民を巻き込み資

金を吸引していく。信用というマジックの歴史はながい。ジャン・ジャンペイルルヴァッド「世界を壊す金融資本主義」は、痒いところを搔いてくれた。ときの大蔵大臣高橋是清の資金調達先であるとか、世界の老舗の両替商であるとか頭をよぎる。原始時代に貝や石でできた貨幣はいつのまにか電子化され莫大な数字に変貌を遂げている。日本も今や借金大国で膨大な負債を抱えているという。借金というのが国債の発行ということになるのだが、この国債、どこのお金持ちが融通しているのだろうか、ふと疑問になる。追求できたとしてもどうすることもできはしないのだが。だいたい日本が誕生したころも、列島内でどうこうというよりも、どうやら大陸の大国の影響のほうがずっと大きく、そういった国家を認識していた連中がいたことは、間違いがない。梅原猛、森浩一、鳥越憲三郎、古田武彦、大林太良、上田正昭、小林行雄、林屋辰三郎、直木孝次郎、谷川健一、ブックサーフィンは続く。